

花とあけちゃん

水上麻由子

子ども時代の私は花を摘んではままごとに使って遊んでいた。小学校では、自分の家の花を新聞紙にくるんで学校へ持っていくような生徒が何人かいて、私もそれをやりたいと母に言った記憶がある。演劇部に所属していた中高時代ようやく舞台上に立てた時にもらった花束はドライフラワーにして家を出るまで部屋に飾っていた。お茶のお稽古に行くと、床の間と玄関にさらりと花が活けられていて、花屋さんには並ぶ洋花とは違う野の花の姿は素朴で神聖だった。立春の日に挙げた結婚式では、夫の恩師が一番の春だと言って沖縄から緋寒桜を持ってきてくださった。

いつからだろう。主婦になると、生きていくための衣食住に必要な花を楽しむことがぱたりとなくなり、小さな子がいると頂き物の花を入れた花瓶の置き場所にも気を使い、わが子が外で花を摘みたがれば、よそ様に迷惑でないかどうかを気にしていた。

数年前にあけちゃんという女性と知り合った。あけちゃんは花と話ができる。花をお客様に届ける仕事をしているが、いつも市場に行くと、花と目が合うのだそうだ。一人一人お顔を見て「あなたとあなたね。」「あら、あなた可愛いわね。」と言って仕入れてくるらしい。普段はふんわりしていて「わあ そうなの?」「すごいわね」といった感じだけれど、お花の仕事をする時の表情は身体全体で花と会話しているようで、真剣な顔になる。レッスンの生徒さんやウェディングや成人式のお客様が、お花に触れて表情がだんだんほころんでくる時が一番幸せを感じるそうだ。それ以来、大切な人のお祝いや悲しみの時に贈る花はあけちゃんにお願いすることにしている。

先日、インドの聖者ヨギを日本にお招きするためのレイを注文した。ヨギの袈裟の色に合わせて、オレンジ色のモカラという花に一針一針心を込めて糸を通してレイにしてくれた。レイはアレンジメントと違って保水のための紙や補強のためのテープなどを使わず、花と糸だけで作るらしい。レイはもとも自然崇拜するポリネシアの島々よりハワイにもたらされた文化で、自然のパワーを得ることで魔除けになると信じられていた。一度首にかけられたレイは他の人に掛けてはいけなと言われる。その人のエネルギーや思い

と一体になっていると考えるからだ。そして、レイが枯れてしまったらゴミ箱に捨てるのではなく、必ず自然に返すことが大切なのだ。とあけちゃんが教えてくれた。

そうだ、花はいのちなのだ。人は古くから自然のいのちを捧げて、歓迎、愛、悲しみや別れの気持ちを伝えてきたのだ。子どもが道端で花を摘んでママに「はい」と手渡す、あの行為。子育てをしている時は日常過ぎて、ただ子どもが満足するよう小さなコップに花を挿しただけだったが、あれは私への最大の愛の表現だったのだと今になって気づいた。誰にも教わらないのに、3つか4つの小さな子に、足元で見つけた可憐な小さな花を大好きな人に贈りたいと思う心があるのだ。あの時、私はちゃんとその気持ちを受け止めたのだろうか。「ありがとう！」と言って毎回毎回抱きしめてやればよかったと、今なら思う。

あけちゃんと出会って、もう一つ記憶に浮かんだ花がある。母が父に離婚の意思を告げた後、帰宅しなくなった父が母の誕生日に大きな大きな白い百合の花束を送ってきたことがあった。それまで母にプレゼントなどしたことのない人だった。母も私も妹も冷めた目でその贈り物を見ていた。が、あれはもしかしたら、プライドの高い父が一生に一度しか伝えられなかった、母への気持ちだったのかもしれない。愛なのか感謝なのか、もつと言葉にできない何かなのか。もう父に確かめることはできないが、20数年前、実家の玄関で白々しく見えていた百合の花束は私の記憶の中で優しい香りを放つようになった。